

THE ATTIC MUSEUM

Vol.8-3 第24号 2014.2.28

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore



特別展

屋根裏の部屋
ATTIC MUSEUM

博の部屋
博物館

渋沢敬三没後
50周年記念事業

特別展

渋沢一家の後継者、渋沢敬三
日線総統へ大蔵大臣を歴任した経済人
彼が本当になりたかったものとは...
屋根裏部屋に込めた学問への思い

2014
3月21日 金祝
▶ 5月6日 火振休

会場 ▶ 埼玉県立歴史と民俗の博物館 特別展示室 季節展示室
観覧時間 ▶ 9:00 - 16:30 (観覧受付は16:00まで)
休 日 ▶ 月曜日 (ただし祝日及び振替日は除く)
観 覧 料 ▶ 一般 600円 (400円) 高校生・学生 300円 (200円)
※C 17歳以上20歳未満の団体料金
※中学生以下と障害者手帳をお持ちの方 (付添人を含む) は無料

埼玉県立
歴史と民俗の博物館
Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

今回は、国立民族学博物館及び^{しづさわはいぞう}渋沢敬三記念事業実行委員会との共催により、3月21日から5月6日まで開催する特別展「屋根裏部屋の博物館」について御紹介致します。この展示会は、渋沢敬三没後50周年を記念して昨年の9月19日

から12月3日まで大阪の国立民族学博物館で開催された同名の特別展を、資料の状態や展示会場の広さを考慮して再構成したのですが、単なる巡回展ではなく、埼玉に関連した当館独自のコーナーも新たに設け、埼玉バージョンとしました。



■ 渋沢栄一の後継者・渋沢敬三

皆様は渋沢敬三（1896～1963）という人を御存知でしょうか。渋沢敬三は埼玉三偉人の一人として知られる渋沢栄一えいいちの孫であり、その事業の後継者となった人物なのです。平成25（2013）年には敬三の没後50周年を記念して、各地でその顕彰事業が行われました。国立民族学博物館で開催された特別展「屋根裏部屋の博物館」もその一つでした。

渋沢敬三は、子供の頃から魚などの水生生物に興味があり、「大きくなったら生物学者になりたい」という夢を持っていました。しかし、父親の篤二とくじが実業家には不向きな性格であったため、祖父の栄一から渋沢家を託されることとなります。旧制高校の受験を控えていたある日、敬三は祖父・栄一の訪問を受けます。栄一は羽織袴姿の正装で、まだ19歳であった孫の敬三に向かって「後継者になっていただきたい、頼む」と平伏して懇願したそうです。

こうして、敬三は自らの夢を捨て、実業界に身を



日銀副総裁時代の渋沢敬三（写真提供 渋沢史料館）

投じることになります。旧制二高卒業後は東京帝国大学の経済学部に進み、卒業後は横浜正金銀行を経て栄一が創立した第一銀行に勤務します。そして、昭和17（1942）年には46歳の若さで日本銀行の副総裁に就任し、さらに翌々年には総裁になり、続いて戦後間もない昭和20（1945）年10月には大蔵大臣に就任し、日本経済の復興に尽力しました。

このように、渋沢栄一の後継者となり日本の経済を動かす実業家・財界人として活躍した渋沢敬三にはもう一つ、民俗学者や博物館人としての顔がありました。

■ 渋沢敬三とアチックミュージアム

祖父・栄一の懇願を受け入れ、その後継者となる意思を固めてからも、敬三は学問への思いを抱き続けていました。それが形となって現れたものが、アチックミュージアムすなわち「屋根裏部屋の博物館」です。その発足は大正10（1921）年、敬三は東京帝国大学の卒業を間近にしていた頃でした。そして敬三は自邸の車庫の屋根裏部屋を拠点に、友人たちと動植物標本や郷土玩具などを中心とした収集活動を始めます。こうした収集活動は昭和5（1930）年ごろにはほぼ収束し、代わって各地で日常生活に使用されてきたさまざまな生活用具や農具などの民俗資料が収集されるようになっていきます。敬三はこれらの民俗資料を「民具」と名付け、アチックミュージアムも屋根裏部屋から新築された2階建ての建物に移り、敬三の私設博物館兼研究所として、彼の援助のもと早川孝太郎・宮本馨太郎・高橋文太郎らの手によって本格的な調査・研究が進められ、日本の民俗学に独自の方法论を樹立していきました。

アチックミュージアムでは約1万点に及ぶ資料が収集されていましたが、これらの資料は昭和12（1937）年に日本民族学会に寄贈され、昭和14

(1939)年にはこれを元として日本民族学会附属民族学博物館が東京都の保谷ほうや（現西東京市）に開設されました。

この保谷の民族学博物館は昭和37（1962）年に閉館となり、約28,000件の収蔵資料は一括して国に寄贈され、さらに敬三の遺志にしたがって同50（1975）年、国立民族学博物館に移管されました。敬三は昭和初期から国立の民族学博物館を作るべきだとの構想を抱いており、アチックミュージアムから始まった敬三の博物館への取り組みはここに至ってようやくその実を結んだといえるでしょう。

敬三はまた、祖父・栄一の顕彰事業として『渋沢栄一伝記資料』の刊行と併せて日本実業史博物館の建設準備も進めていましたが、太平洋戦争の激化のため実現には至らず、収集した資料は戦後国に寄贈され、文部省史料館を経て現在は国文学研究資料館に収蔵されています。

論文を書くのではない、資料を学会に提供するのである——それが敬三自身の学問に対する姿勢でした。そして博物館を、学術資料を保存・公開することにより、誰にでも平等な研究機会を与えることが可能な場として考えたのです。こうした博物館を核とした取り組みを通じ、敬三は多くの若い研究者を育て、学問の発展に貢献したのです。

日本銀行総裁や大蔵大臣といった要職を務め、日本の経済を動かしてきた敬三ですが、彼が本当になりたかったものとは……。屋根裏部屋に込めた敬三の思いが、その収蔵資料から感じられはしないでしょうか。



全国から集められたダルマ（写真提供 国立民族学博物館）

■ 特別展「屋根裏部屋の博物館」の概要

この特別展は、大きくは次の3つのコーナーから成っています。

I 渋沢敬三の人間像と埼玉・深谷

渋沢敬三の祖父・渋沢栄一の生地深谷市血洗島ちあらいじまには敬三もしばしば訪れており、特別の思いを抱いていたようです。このコーナーでは獅子舞の獅子頭など地域に残る資料から渋沢敬三と埼玉・深谷との関わりを紹介し、あわせてその生い立ちや経済人としての側面、戦後の活動を実物資料と写真パネルで多面的に紹介し、渋沢敬三の人間像に迫ります。

II 「屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」から

本展の中心となるこのコーナーは、国立民族学博物館で昨年9月19日～12月3日に開催された特別展「屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」を資料の状態や会場の面積などを考慮して再構成した巡回展となっています。このコーナーでは、絵馬・ダルマ・アシナカあしなかぞうり・釜うけ・塩籠しおかごなど、アチックミュージアムの収集テーマごとに全国各地から集められたさまざまな民俗資料を展示します。

III 埼玉ゆかりのアチックミュージアム資料コレクション

アチックミュージアムの旧蔵資料の中には、八基村やつもと（現深谷市。渋沢栄一の生家のある血洗島を含む）の青年団によって集められた民具や、埼玉県内で収集もしくは生産された郷土玩具なども含まれています。また、敬三は東京帝大の学生時代に足袋工場の調査のため忍町おし（現行田市）を訪れた際に絵馬の収集を行っており、これらの絵馬はアチックミュージアムに引き継がれています。このコーナーでは、こうしたアチックミュージアム旧蔵の埼玉ゆかりの資料を、いわば資料の「里帰り」として展示します。

このほか、関連事業として3月21日（金・祝）には渋沢家ゆかりの血洗島獅子舞（深谷市指定無形民俗文化財）の公演、4月19日（土）には渋沢史料館館長の井上潤氏による記念講演会「渋沢栄一から敬三へ」なども開催致します。多くの皆様の御来場をお待ちしています。（展示担当 大明 敦）

今年 は 春 から 博 物 館

～ 魅力ある博物館を目指して～

当館は今年も1月2日から開館しました。この正月開館の目玉として、本年はダルマのバルーンを登場させました。その大きさもさることながら、「縁起物」としてアピールし、氷川神社への初詣客を博物館に呼び込もうという作戦です。

もちろん、ダルマ頼みだけというわけではなく、職員も寿獅子を演じたり、コバトンに変身したり、様々な事業を展開したりと、各々大奮闘しました。

結果、博物館は大盛況。正月2日～5日までの4日間で3,500人を超える多くの方々に来館していただきました。これは、去年の正月5日間の記録より1,500人以上多い数字です。

こうして、博物館に足を踏み入れてもらった後は、実際に博物館を利用していただくために、様々なイベントを用意しました。ゆめ・体験ひろばでは羽子板遊びなど「昭和のお正月」を無料で楽しんでいただきましたし、常設展示室で実施したクイズラリーでは豪華景品に大人も子供も大満足でした。



人気者のコバトンと寿獅子は大活躍

初詣客は、「歴史に興味がある人」ばかりではありません。「正月と縁起物」の結びつきがピッタリして博物館に来てくださったのです。多くの方に博物館を知ってもらうためにも、こうした働きかけを大切にしていきたいものです。

昨年10月から11月にかけて、常設展示で「埼玉じてんしゃ物語」という展示を実施しました。

埼玉県は自転車王国をアピールし、また自転車競技の世界規模の大会「さいたまクリテリウム」がさいたま市で開催されるなど、自転車はなにかと話題



巨大ダルマバルーンと一緒に記念撮影

となっていたテーマです。

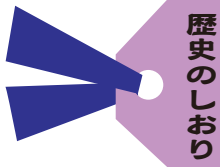
展示の規模は大きくありませんでしたが、時宜にかなった企画であったせいか、報道関係の反応も良く、民放ラジオの生放送取材も受けました。若手職員の発案でインターネットメディアを活用したことも、新たな入館者層の取り込みにつながりました。さらに、期間中には県主催のサイクリングフェスティバルにも出張展示し、700人という大勢の参加者に精力的にチラシも配布しました。興味のある「自転車」と博物館が結びついた結果、自転車ライダーの皆さんを呼び込むことに成功したのです。

このように、今後も「あ、面白そう!」と思っただけの時宜にかなった企画を用意して、多くの方々を博物館に足を運んでくださるよう趣向を凝らしていきたいと思っています。

ところで、件のダルマバルーンにはモデル(?)がいます。本誌の表紙で紹介したとおり、アチックミュージアム(屋根裏部屋の博物館)の資料がモデルとなっているのです。本物のダルマは、埼玉県武蔵町(現入間市)で収集されたもの。3月の特別展で里帰りをしますので、あわせて御覧ください。

博物館のなかで「七転八倒」する毎日。それでも、なんとか「七転び八起き」で仕事と向き合っていきたいと思っています。そして、博物館を多くの方々に御利用いただき、楽しんでいただけたら、このダルマバルーンに目玉を書き込んでみたいと、秘かに願うこの頃です。

(展示担当 田中裕子)



歴史のしおり

金錯銘鉄剣の復元品が寄贈されました!!

(稲荷山古墳出土)

アメリカ・メトロポリタン美術館顧問の小川盛弘氏らが平成19年から復元制作に取り組んでいた稲荷山古墳出土の国宝金錯銘鉄剣の復元品がこのたび当館に寄贈されました。

この鉄剣は、同氏のほか、刀匠の宮入法廣氏（長野県無形文化財保持者）、象嵌師の橋本琇巴氏（埼玉県刀剣審査員）、研師の藤代興里氏・藤代龍哉氏（ともに日本美術刀剣保存協会員）、元当館館長の高橋一夫氏がメンバーの「復元制作プロジェクトチーム」があしかけ7年をかけて制作したものです。

発端は平成19年に小川・宮入両氏が当館蔵の国宝の太刀を調査に来館した際、古代刀剣の研究を進めるために、金錯銘鉄剣の復元を行ってみることに、そして成果品は埼玉県に寄贈することで、当時の館長だった高橋氏と話がまとまったことです。

爾来、7年も時間がかかったのは実際の制作を担当した各氏の鉄剣の忠実な復元へのこだわりでした。

鉄剣本体をこしらえた宮入氏は、古墳時代刀剣の鍛えや実物の金錯銘鉄剣観察、X線写真を参考に原寸大で作刀しました。そして、橋本氏は実物の文字を忠実に写したのはもちろんですが、金象嵌の金成分が文字列の途中で異なっている点も再現しています。続いて、藤代氏は実物の金文字表面に残された研磨痕に着目し、それが現在の「青砥」という砥石に近いことを突き止めたうえで、表面をこの青砥による素朴で力強い仕上げにし、裏面は鏡面に近いスッキリとした現代的な仕上げとしています。

こうして平成25年7月ようやく完成を見た復元鉄剣は、11月13日に小川氏らから上田知事に直接手渡されて、当館の所蔵品となりました。

茎を含めた全長約74cm（実物は切先が欠け、73.5cm）、刃長58.5cm、重さ560g、目の当りにすると実物の鉄剣の制作者「ヲワケ」はどんな気持ちで鉄剣を眺めたのか、なぜ、稲荷山に埋められたのかなど、あれこれ考えてしまいます。

今年度はいち早くさきたま史跡の博物館でお披露目をしましたが、平成26年度は歴史と民俗の博物館で詳しく御紹介しますので、御期待ください。

（副館長 杉崎茂樹）



左 / 復元鉄剣表面全体
右上 / 表面先端部
（青砥による仕上げ）
同下 / 裏面先端部
（現代的な仕上げ）



≡ 安井曾太郎 ≡ 寄居への疎開と細川護立

やすいそうたろう
安井曾太郎(1888(明治21)年～1955(昭和30)年)の名前を、皆様は御存知ですか。安井は、画友・梅原龍三郎とならび「日本の洋画の完成者」として日本近代美術史上、高く評価されています。代表作のうちに、《金蓉》^{きんよう}があります。金蓉とは、安井にとってパトロンの存在だった侯爵細川護立^{ほそかわもりたつ}(元総理大臣・細川護熙^{もりひろ}の祖父にあたります)のお気に入り^{おだざりみねこ}の女性・小田切峰子のことを指します。

大切な人を絵に描いてもらう、このことから細川が安井という画家を高く評価していることが分かります。また、安井から細川に宛てて書かれた書簡を紐解くと、さらに二人の間が親しいものだったことがわかります。安井が寄居に疎開していた時期に、安井から細川に贈られた言葉を、(公財)永青文庫が所蔵する書簡をたよりにみていくことにしましょう。

安井は1945(昭和20)年3月から、1947(昭和22)年11月まで、妻の縁ある本県の寄居に疎開しました。この時期、安井は体調を崩しており、描かれた作品は多くありません。そのなかにあつて、掲載した《荒川付近》は、安井が確かに寄居に住んでいたことを感じさせるものです。

寄居にいた安井曾太郎が細川に書き送った内容のなかで一番多いのは、細川が送った食料への感謝です。安井がもっとも喜んだのは砂糖でした。そのほかに、白米、最中、うどん、コーヒー、角砂糖、牛肉、缶詰、ウイスキーなどが送られたことが書面に記されています。疎開とは、食料を求めてするものもありますが、その点、安井には有力なスポンサーがついていたといえましょう。身体不調だった安井に、細川からの食料は栄養をつける格好の贈り物だったといえます。

そのほかには、戦中戦後の動静をつぶやくように記した表現が比較的多いことに気づきます。

度重なる空襲を嘆く言葉、硫黄島陥落を悲しむ言葉、街にあふれる占領軍のG Iに対する考えなど、当時の日本人の世相に対する素直な感情が、綴られています。

以上のように寄居で安井が記した書簡をみてき

ました。傷めた体をいたわりながら過ごした寄居を離れ、安井は湯河原で静養したあと、東京に戻ります。

休息、制作半々の安井の寄居での日々は、寄居で出会った多くの人に支えられたものであったでしょう。しかし、その一方に細川護立がいたことは確かなことに思われます。彼らの関係は、画家と援助者のあり方に関して、興味深い一例となるものでしょう。

※付記

本稿で参照した安井曾太郎発細川護立宛書簡の閲覧については、(公財)永青文庫にお世話になりました。

学芸員・阿部純子様のご親切なる御対応に感謝申し上げます。



《金蓉》 1934(昭和9)年
東京国立近代美術館所蔵
(細川護立旧蔵)



《荒川付近》 年代不詳 三重県立美術館所蔵
岡田文化財団寄贈

(資料調査・活用担当 佐藤香里)

博物館友の会も設立以来8年が過ぎました。その間、転げつまるびつしながらの運営でした。担当するメンバーは全て会員有志から募ったボランティアです。

「ボランティアに参加」というと大方は福祉が環境の分野と思われる。「博物館でボランティア」というと館が主管する展示解説・体験ボランティアになってしまいます。友の会の運営という活動は、はたしてボランティアなのでしょうか。町内会や地域自治会の役員さんはボランティアとは言いません。それは自治体行政の補完的、肩代わりの組織だからだと思います。博物館友の会も旧来的な発想だと同じ範疇に入ってしまう。あくまで自発的で自由な立場での活動がボランティアなのです。文化庁のHPに「文化ボランティア」という項目があり「文化芸術に自ら親しむとともに、他の人が親しむのに役立ったり、お手伝いするようなボランティア活動」という内容になっています。上の一節から文化芸術を博物館と置き換えれば、現状の友の会の活動にそっくり当てはまります。博物館という大きな枠組みの中で、いかに市民感覚を大切にしたい運営をしていくか試行錯誤の8年間だったと思います。

友の会には会則もあり役員会の規定も定められていますが、系統的に動く強固な組織は持っていません。2つのグループが交互に定番的業務や見学会・講演会などの事業・イベントを担当しています。見方によっては、いまだ未熟とも落ち着かない組織ともとられるでしょうが、型にはまらない自由さや、なによりも運営ボランティア同士のコミュニケーションが密になるなど現状にはあった方法だと思っています。

友の会では発足以来、参加を会員に限定した見学会と一般の方にも参加を呼びかける講演会を2つの柱とした活動を続けてきました。その他グッズショップやワークショップの開催など博物館と協働しての多様なイベントも行いました。これらの企画に参加した会員諸氏の潜在能力には目を見張るものがありました。これからの課題は、こうした多く

の個性豊かな会員のみなさんがもっと積極的にかかわって、生き生きと活動して行ける友の会作りとなるでしょう。

その一環として始めたのが「ミニ講座」と「クラブ活動」です。

ミニ講座の狙いは、当館の学芸員の皆様の専門分野についてお話を聞き、博物館と会員の距離を更に近づけて行きたいことにあります。当面は開催中の特別展・企画展についての解説や裏話、常設展示室のあるコーナーをテーマにした詳しいお話など、企画、展示を担当された学芸員の講座が主となっています。数十人規模の参加を想定していましたが、常に50～60人を超す参加で、名称は今年度よりプレミアム講座に変更しました。

クラブ活動は、友の会会員の中で種々の趣味・嗜好・歴史考古民俗についての掘り下げた興味があり、仲間を募って楽しみたい、学びたいという方の為の事業です。現在は「古道探索クラブ」「日本のお祭り研究クラブ」「映像・写真クラブ」の3つが立ち上がり活発に活動を始めました。今後はクラブ活動のためのしっかりしたガイドラインやバックアップ体制も充実させていきます。

もっと多くの会員が「この指と～まれ!」と手を挙げていただき、500人を超える会員すべてが、いろんなクラブで交流し個性を発揮していく、そんな友の会になれば素晴らしいと思っています。

(友の会副会長 中村 均)



プレミアム講座風景

THE AMUSEUM



歴史と民俗の博物館イベント情報(3月～6月)



埼玉県のマスコット
コマン

3月

- 1日(土) 博物館裏方探検隊
- 8日(土) 博物館裏方探検隊
- 15日(土) 博物館裏方探検隊
- 21日(金・祝) 特別展「屋根裏部屋の博物館」オープン
民俗芸能公演「血洗島獅子舞」
博物館春まつり
- 22日(土) 特別展展示解説、博物館裏方探検隊
- 29日(土) 特別展展示解説、博物館裏方探検隊

5月

- 3日(土・祝) 特別展展示解説、博物館裏方探検隊
- 5日(月・祝) 博物館子供まつり
- 6日(火・振替) 特別展「屋根裏部屋の博物館」最終日
- 10日(土) 新収集品展オープン
博物館裏方探検隊
- 17日(土) 十二単・小袿と男子装束の着装
博物館裏方探検隊
- 22日(木) 藍染め風呂敷づくり
- 24日(土) 博物館裏方探検隊
- 31日(土) 博物館裏方探検隊

4月

- 5日(土) 特別展展示解説、博物館裏方探検隊
- 12日(土) 十二単・小袿の着装体験
特別展展示解説、博物館裏方探検隊
- 19日(土) 特別展記念講演会「渋沢栄一から敬三へ」
博物館裏方探検隊
- 26日(土) 歴史民俗講座、博物館裏方探検隊
- 27日(日) 民俗工芸実演「だるま作り」

6月

- 7日(土) 博物館裏方探検隊
- 14日(土) 博物館裏方探検隊
- 15日(日) 新収集品展最終日
- 16日(月)～23日(月) 館内消毒に伴う臨時休館
- 28日(土) 博物館裏方探検隊
- 29日(日) お囃子体験教室

◆お知らせ◆

65歳以上の方の観覧料につきましては、条例改正により平成25年7月1日から一般の方と同額になりました。御理解のほどよろしくお願いいたします。

イベントは事情により変更になる場合があります。また、事前に申込みが必要なものもありますので、詳細はお問い合わせください。

新収集品展

「日光道中絵巻」などの平成24年度から25年度にかけて新たに収集した資料を展示します。
会期：5月10日(土)～6月15日(日)

◆博物館への資料寄贈をお考えの方へ◆

まずお電話で御一報ください。
TEL:048-645-8171(資料調査・活用担当)
詳しくはホームページを御覧ください。
http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/?page_id=261



交通機関
東武野田線・大宮公園駅下車徒歩5分

埼玉県立 歴史と民俗の博物館

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore (編集発行)

〒330-0803 さいたま市大宮区高鼻町4丁目219番地
TEL. 048-641-0890(管理)
048-645-8171(学芸)
FAX. 048-640-1964
<http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/>



埼玉県立歴史と民俗の博物館だより
Vol.8-3 (通巻)第24号
2014年2月28日発行